
-セカイが私を呼んでいる！-外伝『完全で瀟洒なメイド年代記』

望夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「セカイが私を呼んでいる！」
- 外伝「完全で瀟洒なメイド年代記」

【ZU-1】

N
5
0
5
6
R

【作者名】

望夢

【あらすじ】

[illegible]

「コホン……この物語りは、星乃望夢様と希美様にお仕えしていた執事である私が、^{わたくし}管理人によってお二人とは別の世界へ跳ばされてしまい、その世界で私が紡ぐ物語りで御座います」

序曲

いたいここはどこなのでしょうね？

真っ白な空間にただ立ち尽くす私。確か私は弟様を寝かしつけて…

……

ああ、そのまま弟様の寝顔を見ていたらいつの間にか寝てしまったのですね。星乃家の執事としてなんとお恥ずかしい……。

つと、なにやら言い争いのようなやり取りが聞こえて来ましたね。しかもこの声は……

「落とし穴なんかベタすぎるでしょおおおー！！！！！」

「あー、さすがアニマスピリチュアの持ち主。今でも結構クるなあ〜」

「弟様Σ！？！？」

私が駆け寄る前に弟様の姿が消えてしまった。この幼女の仕業か！！

「今すぐ弟様を返して頂きたい」

私は仕込みナイフを少女の首に突きつけながら言う。

「あらあら、彼だけ喚ぶつもりがオマケまで付いてきちゃったか」

「2度も言わせないでください。弟様を返して頂きたい」

突きつけたナイフには目もくれずに、普通に困っているようにしか見えない。

早くして頂きたいんですけどね。
私は意外と我慢強いのですよ。

「ま、しょうがないか……君も旅立ってもらおう」

「いい加減にして頂けますか？早く弟様……を……」

突然身体を襲う脱力感。

い、いったい……なに……を……

「ふふ、そういえば、あそこにはまだ誰も送ってなかったね……
あは、良いこと思いついた！」

脱力感に引つ張られて気を失ってしまうまでに聞こえたその言葉の意味を理解するのは、次に目を覚ました時だった。

キャラ設定

名前：十六夜 咲夜

読み：いざよい さくや

二つ名：完全で瀟洒なメイド・殺人姫

能力：時間を操る程度の能力

種族：人間

管理人によって異世界に跳ばされた星乃兄弟の執事。

しかし目が覚めたらさつきゅんになっていた。

PAD長とは呼ばせない！ちゃんと人並みにはあるんですっ！

裏社会では黒コートを羽織ってまんま殺人姫スタイルで仕事をやっていた。

ちなみにタバコを吸います。銘柄はPARLIAMENT。

さつきゅんになってから良くも悪くもさつきゅんに染まりきってしまっている。

ブッハも何回かやったことがあります。

割と天然におっちょこちょいがプラスされている。

唯一違うのが、右目が紅かったり、髪の毛の三つ編み部分をストリートにして普通にリボンで縛っていたりとマイナーチェンジはしている。

さらにオリスペカを何枚か作ったりもする。

キャラ設定（後書き）

この世界の主人公？である元執事現P……メイド長のさつきゆんに
関する設定でした？

第一節：メイドと巫女（前書き）

注意！！メイド長ファンの方は閲覧を控えます様御願い致します。

第一節：メイドと巫女

「初音島……いよいよ…と、いったところね」

船に揺られること数時間。

ようやく目的地が見えて来た。

この世界にやって来てから早くも数十年が過ぎたけれど、私のこの身体と能力のお陰で歳は取らず、一応の不老の存在となり、情報を仕入れたり生計を立てる為に、裏社会で用心棒等をして過ごしていた。

筋力や防御力は以前よりも落ちてしまったけれど、代わりに小柄になり身体も軽くなり素早さが上がった。

それ以前に能力やスペカを使ってしまえば、この世界では敵無なのよね。

当たり前ね。いくら強い人間だろうと、時間を止めてしまえば対処は不可能なのだから。

私はスカートのポケットから銀時計を取り出してひと撫でした。

私を持ち込めた私物は――着たまま寝てしまった燕尾服（今ではサイズが合わずにブカブカ）に、手袋と僅かな武器に、この銀時計のみ。

この銀時計は私と望夢様と希美様の絆の証とも言え、今では能力の発動媒体。

二重の意味で大切な代物である。

「あの……！」

「え？」

カチッ！

誰か……声からして10代中盤辺りの少女に呼ばれたと思ってたら、銀時計のリユーズを押してしまった。

それで世界の時は止まる。

いけないわね。集中していて驚いて時を止めてしまうなんて。魂は身体に引っ張られると言うけれど……いえ、今のは完全に私の落ち度ね。

ちょうど良いため、声をかけてきた少女に振り返り、相手を見て少しキョトンとして、周りを見てなるほどと頷き、今居る場所——船の側面の廊下から2、3歩下がりつつ、少女を横抱きに抱えながら、

「そして時は動き出す……」
カチッ！

再びリユーズを押した。

「きゃ！……い、いつの間に……」

耳に残る心地良い声を堪能しながらも少女を降ろす。

「礼を言わせて頂いわ。お陰で服が濡れずに済んだわ」

「あ、いえ、どう致しまして」

少し気恥ずかしそうに此方に返す少女。

無理もないわね。同性といっても、そうそうお姫様抱っこはされた経験は少ない筈だし……。

目の前の15、6歳の少女を見ながら思う。

Summer Vacationで初めて私服披露とあって、この時も巫女服なのね……。

初音島＋巫女服の少女

胡ノ宮このみやたまき環

まさかこの時期（10月後半）に出逢うなんて想像もしていなかったわ。

なにせ物語りに登場するのはもう少しあとなのだ。

初音島の桜はまだ散ってはいないから、これでアニメ路線は気薄になったわね……今更ね。此処には確かに初音島はあれど人も普通に存在し、物語りの世界とはいっても現実には変わらない。

ちなみに私はこういう恋愛物は王道のハッピーエンドが好きね。ハ

ーレムエンドはあまり好きではないわ、オリキャラ介入＋オリキャラハーレムエンドはもっと好きでないと、内容が薄いものが多かったりするから微妙なところね。

不良とかに絡まれているのを助けて一目惚れはまだ解らなくもないけれど、ひどい時はニコポやナデポで落ちたりするなんてものもあるし……女の恋愛はそんなに軽いものではないわよ？

「あ、あの」

「ああ、ごめんなさい。少し考え事をしてしまったわ、メイドたる私には致命的なミスね。申し訳なかったわ」

「メイドさんなのですか？」

「ええ、こう見えてもれっきとしたメイドよ」

といつても、この世界に来てから誰にも仕えていないけれど。私の主人はあのお二方以外に有り得ないわ。

ちなみに今の格好は黒のタートルネックに紺のワンピースに黒コートという格好をしているわ。え？メイド服じゃないのかって？メイド服は仕事服だから今は着なくてもいいのよ。第一、メイド服で普段出歩けるわけじゃない。幻想郷ではないのよ……まあ、初音島なら問題ないでしょう。時と場合によってはネコミミメイドが現れるのだし、何気に初音島にはお金持ちの家が複数点在しているわけだし。

「あなたは見た目通りの巫女さんでいいのかしら？」

「ええ。あ、自己紹介をしていませんでしたね。私は胡ノ宮環と申します」わたくし

「十六夜咲夜よ。貴女は初音島の出身？」

「え？…ああ、はい。一応…ですが何故おわかりに？」

「初音島には胡ノ宮という名の神社があつたのを思い出したのよ。胡ノ宮なんて名字は珍しいもの、だから試しに訊いてみたのよ」

「そうだったのですか……。あ、十六夜さんは初音島へご旅行ですか？」

「いいえ、個人的な引越しよ。ちなみに学校に行こうと思ってるから、運が良ければ同じクラスになれるかもしれないわね」

「そうなのですか！もしそうなった時はよろしくお願い致しますね」

「ええ、私も同じクラスになれる様祈っているわ」

その後、私達は互いに互いの事を少し話し、船が港に着いた為別れた。

しかし5分後――

「同じ方向だったんですね」

「そうね……。でも私としては助かるわ。見ず知らずの土地を独りで行くよりかは、誰かと一緒の方が退屈しないでいいし心細くもなくなるわ」

向かう先が一緒の方向だったらしい2人は並んで歩いていた。

女3人寄れば姦しいとは良くもいったものだが、2人でも充分姦しい。

その理由としては、咲夜はもとより環に関しては複数の仮説が立てられるが、今ここでそんなことを考えるのは野暮だといった風に咲夜は環との会話を楽しんでいた。

そしてそんな楽しい時間は早く過ぎる物で――

「っと、ここでお別れかしら？」

「そうですね」

あっという間に胡ノ宮神社へと続く石段の前に着いてしまった。

「十六夜さんはどちらまで行かれるのですか？」

「そうね……」

一応頭に新居の位置は記憶してあるけれど、せっかくだから確認も兼ねて……

そう思いながらコートのポケットから手書きの簡単な地図を出す。

「それほど遠くないわね」

少し戻る感じだけでも、楽しい時間の余韻がそれを忘れさせてくれる。

「では、そこまでご一緒させて頂きます」

「あ、別にいいわよ。貴女は荷解きとかあるでしょう?」

それに彼女のことだ。着いてくれば最後まで着いてくると思うし、それも来た道に戻る様になれば変に責任を感じるかもしれない。

良くも悪くも優しいのは、この物語りの登場人物達の共通的な物の為、例にもれない環も優しいことを知っている咲夜からすればできればここで別れておきたいのだ。

「私は特に今これといって荷解きをする荷物はないので……それとも、ご迷惑でしたか……?」

頼むからそう、捨てられた子犬の様な顔をしないで欲しいのだけだ。断るにも断れないじゃない。

元執事で元紳士で女性に礼を尽くしていた主2人の影響から、咲夜は女性にあまり強く出れないという一面がある。最もそれはある程度付き合う様になればマシにはなるが……今の2人の関係では結果は目に見えていた。

「別に迷惑とは思っていないから、そんな顔をしないで。まるで私が悪者みたいじゃない」

「す、すみません……」

別に責めているわけではないのに、俯いてしまった環。
やれやれといった感じで一息吐き、

「別に貴女がいいなら、ついて来てもいいわよ」

「はい！是非一緒に」

ガバツと顔を上げて今度は嬉しそうに目を輝かせる彼女。

こんなに喜怒哀楽が激しい娘だったかしら？

自分の記憶とはあまり当てはまらない一面に、心の中で首を傾げる咲夜だった。

その後、咲夜の家となる場所——胡ノ宮神社と学校の間地点の小

さな平屋建ての家に到着。案の定、道を戻った上に神社からそれなりに離れてしまったとあって、どこか申し訳なさそうな顔の彼女にでこぴんを喰らわせてみたりしつつ、2人は2人が通う学校——『風見学園』に赴いて書類手続きを済ませ、控えめに断る環を強引に連れて胡ノ宮神社まで彼女を送り、1日目が早くも終わりを告げた。

第一節：メイドと巫女（後書き）

無理やり終わらせた感爆裂？

主人公？がメイド長なのはほとんど自己満足です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5056r/>

-セカイが私を呼んでいる！-外伝『完全で瀟洒なメイド年代記』

2011年6月16日10時16分発行